

## 「ベニテングタケ」

「赤いキノコは毒」というのは、広く信じられている誤った常識(迷信)です。むしろ赤いキノコよりも、茶色や白いキノコに猛毒のキノコが多いのが事実です。例えば、コレラタケ(茶色)、ドクルルタケ(真っ白)などです。「虫が食べていれば無毒」「茎が縦にさければ食用」などもすべて誤りですが、日本人の間で根強く信じられている誠に厄介な迷信です。こうした迷信や伝承が原因で、今でも毎年キノコによって命を落とす人が後を絶たないわけです。「この外見的な特徴があれば毒」という共通した見分け方は存在しません。毒キノコは圧倒的に種類が少ないので、全部覚えてしまうよりほかありません。

赤いキノコで、間違いなく毒があるのはベニテングタケ(紅天狗茸)です。シラカバの林床を好むこのキノコは、真っ赤なだけでなく傘に白いイボイボがあり、毒キノコ度100%って感じの風貌です。テングタケ科のこのキノコは、地中に蛇の卵のような幼菌をつくり、生長するとその殻(外套膜)が破片状にキノコの傘につくのです。その特徴ゆえ可愛らしささえ感じさせ、世界中でさまざまなキャラクターやシンボルマークとして親しまれています。



「キノコの雑貨いろいろ」 そのモデルはかなりの確率で「ベニテングタケ」

ベニテングタケの毒成分はいくつかありますが、幻覚性の毒も含むので、南米の原住民は祭りの前の気分高揚に、毒と知りながらそのまま食べるそうです。また、毒成分の一つのイボデン酸(アミノ酸の一種)が優秀なうま味成分なので、ベニテングタケは大変美味しいキノコなのだそうです。信州では毒抜きをして食用にするとも聞きました。もちろん素人は、絶対に手を出さないほうがいいですね。イボデン酸はハエにも作用し、ベニテングタケにとまったハエはすぐに麻痺してしまいます。「ハエとり」にも使われるそうです。

さて、一部のキノコに毒がある理由は何でしょう? 「虫を寄せ付けないため」「獣に食べられないため」・・・それならば、すべてのキノコが毒を持っていても良さそうです。同じ

テングタケ科の近縁種のキノコでも、猛毒のものと食用のものがあるのも納得がいきません。同じように、発光するキノコというのも不思議です。ブナの立木に生える「ツキヨタケ（月夜茸）」やシュロの木に生える「ヤコウタケ（夜光茸）」などです。ホタルとちがって、キノコは互いに存在を知らせ合う必要はありません。「虫を寄せて胞子を運んでもらうため」・・・光らないキノコにも夜間、虫はたくさん来ます。

この問いに対する私の結論は、「キノコが毒を持ったり、光ったりするのは、単なる偶然。」ということです。キノコは地面や樹木の養分を分解・再化合して、さまざまな物質を作っています。その一部の物質が、「たまたまヒトにとって毒だった」「たまたま可視光を発する物質だった」というだけのような気がします。たぶんキノコにとっては、何の必然性もないのでしょう。

私の山荘の庭にもシラカバが多いので、毎年ベニテングタケが発生します。もちろん食べたことはありません。皆様も、是非夏の高原で探してみてください。



「ベニテングタケ」 *Amanita muscaria*

シラカバの根元に毎年発生します。いかにも毒キノコですが、はい、毒キノコです。学名の“muscaria”は、毒成分のムスカリン（アルカロイドの一種）に由来します。副交感神経に作用する猛毒ですが、わずか 0.0003%しか含まれていないそうです。

（お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋）